

平成 26 年度 卒業論文

2015 年 2 月 3 日

# 仏教各宗派の総本山の周囲に 寺院が集中しているか否か

法政大学 理工学部 経営システム工学科

経営数理工学研究室

1 1 X 4 1 3 4 三宅 英司

指導教員 五島 洋行 教授

学科名	経営システム工	学籍番号	11X4134
申請者氏名	三宅 英司		
指導教員名	五島 洋行		

## 論文要旨

論文題目	仏教各宗派の総本山の周囲に寺院が集中しているか否か
------	---------------------------

本論文では、総本山の周囲に寺院が集中しているのか否かを検証する。

寺院の多くが他の寺院と助け合って治めている場合がある。助け合って寺院を治めていくためには、寺院同士が近い方が迅速に対応するためには便利なはずである。また、宗の行事は総本山の周囲の寺院が協力して行われることが多い。以上のことより総本山の周囲には寺院が集中しているという仮説を立てる。

仮説を検証するために、前提として検証対象の寺院を宗ごとに区別して検証を行う。総本山から 30km 以内の範囲に存在する寺院数を求め、それを元に総本山の周囲に寺院が集中しているのかを判断する。検証対象の宗は第二次世界大戦前に国家に認められたとされる 13 の宗の中から総寺院数が 1,000 軒以上の存在する七つの宗とする。

検証対象宗の総本山では、ほとんどの総本山で仮説通りの結果が得られた。しかし、七つの宗の中でも総本山が複数存在する宗があり、そのような宗では、片方の総本山の周囲に寺院が集中し、もう片方の総本山では集中しなかった。一方、総本山が一つの宗では、すべての総本山の周囲に寺院が集中するという結果が得られた。

本研究により、総本山の周囲には寺院が集中していることがわかった。その理由は、総本山の周囲で相互の協力が行われるのに、寺院同士が近い方が利便性が高いためであると考えられる。

## 目次

第1章	はじめに	1
1.1.	研究背景	1
1.2.	研究目的	2
第2章	先行研究	3
2.1.	北海道の寺院の分布	3
2.2.	仏教地域区分図の作成	3
2.3.	本研究との相違点	4
第3章	使用データと検証方法	5
3.1.	検証を行う宗の選定	5
3.2.	寺院住所データ	5
3.3.	各寺院から半径 30km 以内に存在する寺院数の調査	6
3.4.	各寺院から総本山への距離	7
第4章	検証結果・考察	8
4.1.	総本山の周囲に寺院が集中しているか否かの検証	8
4.2.	全体の考察	19
第5章	おわりに	20
	参考文献	21
	謝辞	22

# 第1章 はじめに

この章では本研究を行うに至った背景や総本山の周囲には寺院が集中しているという仮説がどのような理由で立てられたのかを述べる。

## 1.1. 研究背景

今日、日本は無宗教国家と言われることもあるが、日本で仏教は全国各地で広まっており、多くの人々が仏教を信仰している。もともと仏教は紀元前 5 世紀頃、インドで誕生した。それから長い月日を経てアジア各地に広がり、中国、そして朝鮮半島の百済を經由して 538 年に日本に仏教が伝わったとされている[1]。さまざまな仏教の文化が生まれ、盆踊り、そして開運出世や商売繁盛などの縁起物でもあるダルマ人形などの仏教に関係した文化や風習が現在も続いている[2]。

日本には 82,145 の仏教の宗教団体が存在する[3]。その中の多くの寺院に僧侶が配置されており、住職が一人だけで治めている寺院と副住職などの住職以外の僧侶が複数の在籍する寺院も存在する。それぞれの寺院で住職やその他の僧侶は責任を持って寺を治めている。

日蓮宗の法音寺豊川支院の主観者によれば、寺院を治めるうえで以下のような事が実際に行われている。住職が一人で治めている寺院でも、住職が用事で寺院を留守にしなければならない場合がある。その留守の間に人が亡くなること、何か仕事が入ることがあればすぐにその寺院の住職に連絡が入るように手配をしておく。しかし、連絡を受けてすぐに対応できないことがある。その際は法縁と言って同じ師匠から得度した住職がいる寺院同士で対応する場合や、近所の同じ宗の寺院で対応する場合がある。また、葬儀の際にも法縁や近所の寺院と協力して複数の僧侶で壮大な葬儀を行われることもあり、多くの場面で助け合っている。また、住職が死亡もしくは病を患ってしまったときなど、住職としての仕事を継続できなくなってしまうことがある。そのときは世襲で住職の親族で後継ぎがいれば新たな住職として寺院を治める。しかし親族に後継ぎがないことも珍しくなく、後継ぎがない場合は僧侶の人数の多い総本山もしくは大きな寺院から僧侶が新たな住職として派遣されることが多い。寺院は個人の所有物ではないため、大勢の檀家を抱えている場合は世襲、派遣もしくは兼務という方法で誰かが必ず住職として治めることになっている。このように一般の寺院と総本山は関係がずっと続いていき、総本山との距離や関係が重要となる。

## 1.2. 研究目的

一般的にそれぞれの寺院は、住職が一人、もしくは家族で協力して治められているように思える。しかし、実際は寺院の多くが他の寺院と助け合って治めている場合もある。助け合って寺院を治めていくためには、寺院同士が近い方が迅速に対応するためには便利にはずである。そこで、寺院はある程度集中して建立されているのではないかと推測する。

また、総本山と全国の各寺院の僧侶との関係は、一人前と認められるための修行、自分が引退した後の寺院の新たな住職の決定などの様々な場面で続いている。さらに、新たに住職を選ぶ際には、総本山や大きな寺院から僧侶が派遣されることがある。その時に僧侶自身がその地域にゆかりがある方が新たに住職として派遣される際にある程度馴染みやすくなると想像できる。そこで、総本山や大きな寺院の周囲に同じ宗の寺院が集中しているのではないかと考えた。

また、宗全体で記念行事を行う際は、総本山が中心となって準備を進めることが多い。さらに、行事の開催場所が総本山になることが主である。しかし、総本山の僧侶、事務員だけで行事を成功させるのはとても大変である。その際は周囲にある寺院の住職が協力して行事を盛り上げることもある。

このように、寺院が集中していることは便利である。また、派遣される僧侶が地域にゆかりがあることがメリットであると考えた時、総本山や大きな寺院の周囲には寺院が集中していると考えられる。加えて、宗の行事の際に総本山の周囲が協力している。以上のことより総本山の周囲には寺院が集中しているという仮説を立てる。この仮説を検証するのが本研究の目的である。

## 第2章 先行研究

この章では本研究で扱う寺院の分布についての先行研究を紹介する。

### 2.1. 北海道の寺院の分布

「北海道における仏教寺院の分布について」

永幡[4]は一つの都道府県に絞った研究で、北海道における各宗派の寺院の分布を研究している。北海道は、開拓によって他の地域の宗教文化が伝わってきた宗教に関しての新興地域である。現在どの宗派の寺院がどのように分布し、宗派の勢力の拡大の要素が何であるかを明らかにすることを目的とした研究である。寺院の建立した年代別の寺院分布の分析をしており、北海道の中でも海辺に面して分布している宗派やその地域の土地の豊穡などを考慮した分析がされている。

### 2.2. 仏教地域区分図の作成

「日本における仏教諸宗派の分布—仏教地域区分図作成の試み—」

小田[5]の研究は、四つの先行研究をもとに、日本における仏教の各宗派の分布についての分析を行っている。宗派別及び都道府県別の分布データより、宗派や地域分類を行う。しかし、小田が参考にした先行研究内で扱われているデータの解析に不備があり、誤った結果であることがわかった。また、作図も統一されておらず理解しにくい点も存在する。そこで小田は、これらを整理することで、データに沿った正確な結果を導出した。一般に、仏教分布の指数には寺院数が用いられるが、他の先行研究では入手困難とされている信者数のデータも扱っている。しかし、小田は信者数と寺院数にあまり相関がない点や、地域別信者数データの妥当性を疑っている。そこで、小田は檀家数データを用いた分析を行った。小田が参考にした「宗教精度調査資料」には、都道府県別及び宗派別の檀家数データが入っており、その精度も高いことから研究で活用した。

これらより、地域別の各宗派の分布を再分析し、先行研究の精度を高めた。さらに檀家を考慮した分析を行うことで、新たに日本の仏教地域を七つの区域に分けることができた。よって、正確にデータを扱い異なった指標を用いることで、新たな分析結果を得ることができた。

### 2.3. 本研究との相違点

永幡の文献[4]の論文では都道府県ごとの分析をしている。また、文献[5]では、都道府県ごとの区切りがされておらず分析も全国の檀家数を参考にして仏教の地域区分を行っているが、総本山と関連した研究がされているわけではない。

現時点で存在している寺院の中には、1871年に廃藩置県によって日本全国を都道府県と区別する以前から存在した寺院は多い。そこで都道府県という近代的な概念ではなく、距離という時代によらない普遍的な指標で研究を行う。そして、寺院の住所データをもとに寺院の分布を行い、それを元に総本山の周囲に寺院が集中しているか否かを検証する。

## 第3章 使用データと検証方法

本章では第1章で立てた、「総本山の周囲には寺院が集中している」という仮説を検証するのに使用したデータ、仮説の検証方法、使用した数式について述べる。

### 3.1. 検証を行う宗の選定

第二次世界大戦前には13宗56派が国家に公認されている。その13宗とは、天台宗、真言宗、浄土宗、浄土真宗、臨済宗、曹洞宗、日蓮宗、法相宗、華嚴宗、律宗、融通念仏宗、時宗、黄檗宗の13宗である[1]。実際日本には多くの宗派が存在している。しかしあまりにも多く、扱いきれないため、国家に公認されている13宗に絞って本研究を行った。また、戦前に認められた宗の中でも、寺院数が少なく、本研究で用いるには適さない宗も存在する。そこで、今回は寺院数が1,000軒以上存在している浄土宗、真言宗、曹洞宗、天台宗、日蓮宗、臨済宗、浄土真宗の七つの宗を対象として宗ごとに検証を行う。また、総本山の定義はそれぞれの宗で中心となる寺院である。よって、それぞれの宗において総本山と呼ばれる寺院が多く存在する必要があるが、本研究では文献[2]を参考に総本山を決定する。

### 3.2. 寺院住所データ

本研究では、寺院の住所データを用いて検証を行う。寺院の住所データは「株式会社協栄プランニング 日本寺院総鑑 Ver6.0 全国版」である。宗派名、寺院名、郵便番号、住所、電話番号、FAX、住職名、副住職名、兼務、本尊、ホームページURLが記載されており、表1のような形式になっている。その中でも宗派名、寺院名、住所を使用する。寺院の住所を座標に変換し、宗派ごとに分けた座標と寺院名だけのデータをcsvファイルに変換して使用する。また、本データには廃寺になったものは含まれない。

表1：寺院住所データのデータ形式

No	宗派名	寺院名	郵便番号	県名
1	天台宗	太子寺	064-0921	北海道
住所		電話番号	FAX 番号	
札幌市中央区南21条西10-1-5		011-521-1797	011-521-1797	
住職名	副住職名	兼務	本尊	URL
阿部玄俊	阿部俊哲		聖徳太子救世観音	

### 3.3. 各寺院から半径 30km 以内に存在する寺院数の調査

第 1 章で立てた「総本山の周囲には寺院が集中している」という仮説を検証するために以下のように実験を行う。まず、検証対象の寺院を宗ごとに区別して検証を行う。次に、ある宗の全ての寺院で、半径 30km 以内に寺院が何軒存在するのかを調べ、その平均値を算出する。平均値と総本山の半径 30km 以内に存在する寺院数を比較し、平均値を総本山の半径 30km 以内に存在する寺院数が上回れば総本山の周囲に寺院が集中しているとする。

理解しやすいように日蓮宗を例に挙げて説明する。日蓮宗のある寺院から半径 30km 以内の範囲に、日蓮宗の寺院が何軒存在するのかを調べる。それと同じことを日蓮宗の全国の寺院で調べる。その後、日蓮宗の全国の寺院の調査結果の平均値を算出する。平均値と日蓮宗の総本山の半径 30km 以内に存在する寺院数を比較することで総本山の周囲に寺院が集中しているかを判断する。実際日蓮宗では、平均値が 190.5 であるのに対し、総本山から半径 30km 以内の範囲に 393 軒存在している。よって日蓮宗では総本山の周囲に寺院が集中している。つまり仮説通りの結果が得られたという事になる。

図 1 は半径 30km の円がどの程度の大きさになるのかを表した例である。青色の点は日蓮宗の寺院の分布である。

この実験を半径 30km で検証を行った理由は、四国八十八ヶ所お遍路の道のりは、第一番の徳島県の霊山寺から第八十八番の香川県の大窪寺まで、約 1,400km に及ぶ。全てを歩くと 50 日程度かかると言われている[6]。1,400km を 50 日で歩くと 1 日当たり 28km を目安に歩くことになる。このことを参考に、この実験ではおおよそ一日で歩くことができる距離を 30km として、各寺院から 1 日で移動できる 30km を半径として実験を行った。

また、対象となる全国の全ての寺院の半径 30km 以内に、いくつの寺院が存在するのかを計算する際に、Visual Basic でプログラムを組んで行った。距離を測りたい二点の経度緯度の座標を「Sis1.MeasureGreatCircle(経度座標, 緯度座標, 0.0, 経度座標, 緯度座標, 0.0, "\*"JGD2000")」という関数に打ち込むと地球が球体であることを考慮された距離を計測することができる。

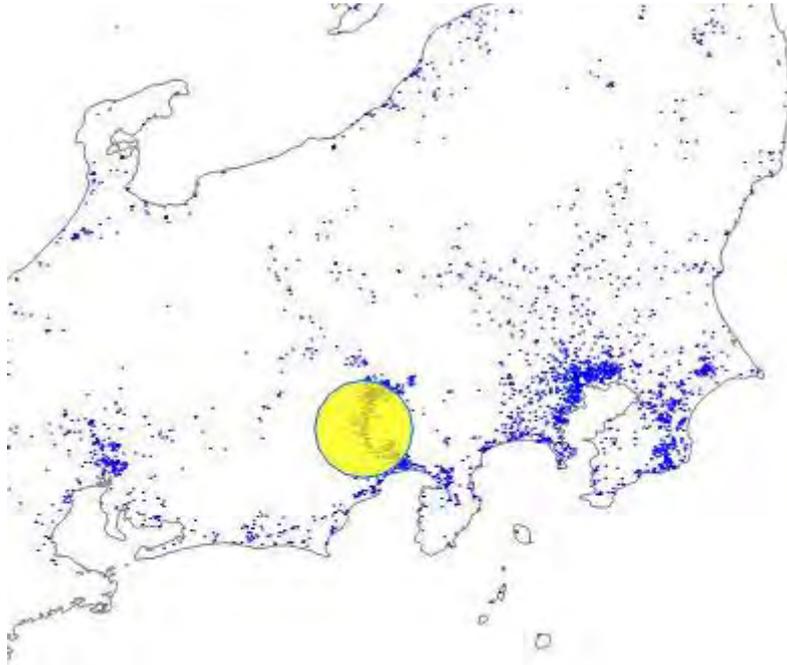


図 1 : 半径 30km の円の例

### 3.4. 各寺院から総本山への距離

検証対象の宗の全ての寺院で総本山までの距離を求め、総本山からの距離と範囲内の寺院数の割合のグラフを作成する。グラフの階級数を決定する際に(1)のスタージェスの公式を用いる。

$$K = 1 + \log_2 n \quad (1)$$

スタージェスの公式とは、ヒストグラムの階級数を決定するときによく用いられる式である。階級数を $K$ 、観測値の数を $n$ として、以上のように表される。

3.3の実験では、周囲の寺院数を調べて総本山の周りに実際寺院が集中しているのかの分析を行い、3.4の実験では各宗の全国の寺院から総本山までの距離を求めて全国レベルでの分析をする。二つの実験を行う理由は、寺院の周囲に着目した視点と全国的な広い視点の異なる二つの視点の実験を行うことで、より多くのことがわかる実験結果が得られると考えたためである。

## 第4章 検証結果・考察

この章では、「総本山の周囲には寺院が集中している」という仮説が正しいのか否かの結果を、日本における代表的な13の宗派から、総寺院数1,000軒以上の宗派の3.3と3.4の実験の検証結果を元に宗ごとに述べる。

また、4.1章に載せるすべての表は、各宗の総寺院数、総本山から半径30km以内の範囲に存在する寺院の数、全国の寺院から半径30km以内の範囲に存在する寺院数の平均値、中央値、最頻値を記載する。

### 4.1. 総本山の周囲に寺院が集中しているか否かの検証

○浄土宗

- ・開祖：法然（1133～1212）
- ・総本山：知恩院
- ・所在地：京都府京都市東山区林下町400
- ・総寺院数：8,377軒

表2は浄土宗の総本山に対する3.3の実験結果をまとめた表であり、図2は浄土宗の総本山からの距離と範囲内の寺院数の割合のグラフである。表2を見ると、総本山である知恩院の半径30km周囲では、1,083軒の寺院が存在していることが分かった。また、平均値が1,339軒という結果が出たため、この実験では仮説通りの結果が得られなかった。しかし、図2を見ると知恩院から約90km以内の場所で3割以上の寺院が存在していることが分かり、総本山の周囲には寺院が集中していると言える。また、このように異なる結果が得られた理由を推測すると、今回の実験3.3.では寺院が集中している地域では、その地域にある寺院の多くが互いに30km以内に存在しているという判定になってしまうため、一部の密集している地域に平均が引っ張られてしまうという問題があると考えられる。実際、知恩院の30km以内の寺院数は総数の約13%を占める。よって浄土宗の総本山である知恩院の周囲には寺院が集中していると言える。

表2：浄土宗の各寺院から30km以内の寺院数の統計量（軒）

平均値	中央値	最頻値
1,339	276	38
総数	8,377	
知恩院	1,083	

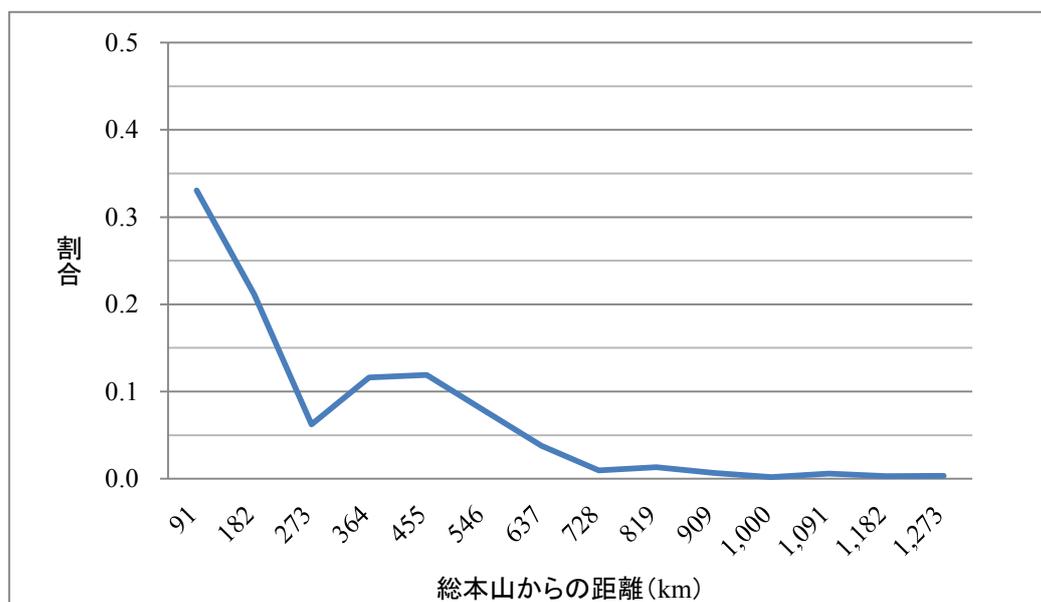


図 2：浄土宗総本山(知恩院)からの距離と範囲内の寺院数の割合

### ○真言宗

- ・開祖：空海（774～835）
- ・総本山：金剛峯寺
- ・所在地：和歌山県伊都郡高野町高野山 132
- ・総寺院数：12,936 軒

表 3 は真言宗の総本山に対する 3.3.の実験をまとめたものであり、図 3 は真言宗の総本山からの距離と範囲内の寺院数の割合のグラフである。表 3 を見ると、真言宗の総本山である金剛峯寺では、半径 30km の周囲に 638 軒存在することが分かった。平均値の 331.6 の 1.9 倍の寺院が存在することになる。この結果より、真言宗では総本山の周囲には多くの寺院が存在するといえる。また、図 3 を見ると近くに全体の 15%の寺院が存在していることが分かり、寺院が集中しているといえる。また、金剛峯寺から約 360km~450km の周辺で真言宗の総寺院数の 3 割が存在している。金剛峯寺から約 360km~450km は関東地方に該当する。文献[7]によると城下防衛のために城下町には寺院が配置されていたという背景がある。関東地方には小田原城、江戸城などの城が存在した。それらの城下町に寺院が集中して配置された名残があり、現在にもそれが存在していると考えられる。また、関東は鎌倉幕府や江戸幕府などが開かれた地で、信仰する人々が多くいたと考えられる。このような理由により総本山である金剛峯寺の周囲よりも多くの寺院が集中したと推測する。

表 3 : 真言宗の各寺院から 30km 以内の寺院数の統計量 (軒)

平均値	中央値	最頻値
331.6	241	92
総数	12,936	
金剛峯寺	638	



図 3 : 真言宗総本山 (金剛峯寺) からの距離と範囲内の寺院数の割合

## ○曹洞宗

- ・開祖：道元（1200～1253）
- ・総本山：永平寺，總持寺
- ・所在地：永平寺（福井県吉田郡永平寺町志比 5-15）  
          總持寺（神奈川県横浜市鶴見区鶴見 2-1-1）
- ・総寺院数：14,604 軒

表 4 は曹洞宗の総本山に対する 3.3.の実験結果をまとめた表であり，図 4，図 5 は曹洞宗の総本山からの距離と範囲内の寺院数の割合のグラフである．表 4 を見ると，総本山の一つである永平寺では半径 30km 以内に 110 軒あり，平均値 234.3 の半分にも満たないことが分かる．一方，總持寺では 425 軒存在し，平均値の 1.8 倍の寺院が存在する．よって，この実験の結果より，永平寺の周囲には集中しておらず，總持寺の周囲では寺院が集中していることが分かる．また，このように永平寺では仮説通りの結果が得られず，もう片方の總持寺では仮説通り寺院が集中しているという結果が得られた理由に，二つの総本山が離れて存在していることが考えられる．離れて存在していることにより勢力が分散してしまい，このような結果が得られたと推測する．以上のことより曹洞宗では，永平寺では仮説通りの結果が得られず，總持寺では仮説通りの結果が得られたとする．

さらに，図 4 でも総本山の永平寺の周囲には寺院があまり集中していないことが分かる．このように永平寺に寺院が集中しなかった背景には，曹洞宗の開祖であり，永平寺を建てた道元が，中国の宋での修行を終えて帰国する際に師匠から贈られた「栄えた都市に住まないで，深山幽谷に住みながら一，二人の弟子を教育せよ」[1]という言葉の影響だと考えられる．その言葉を受け，道元が永平寺の周囲を敢えて曹洞宗の町として栄えさせなかったと推測する．また，一方でもう片方の総本山である總持寺の周囲に寺院が集中している．總持寺では，道元の跡を継いで曹洞宗を治めた四代目の僧が道元の教えを親しみやすい教えにし，民衆に広め，信者を増やした．その結果總持寺は発展を続け規模の大きな寺院になった[2]．と言われている．また図 5 では，總持寺から 75km の周囲に 10%以上の寺院が存在しており，ある程度集中しているといえる．

表 4：曹洞宗の各寺院から 30km 以内の寺院数の統計量（軒）

平均値	中央値	最頻値
234.3	183	94
総数	14,604	
永平寺	110	
總持寺	425	

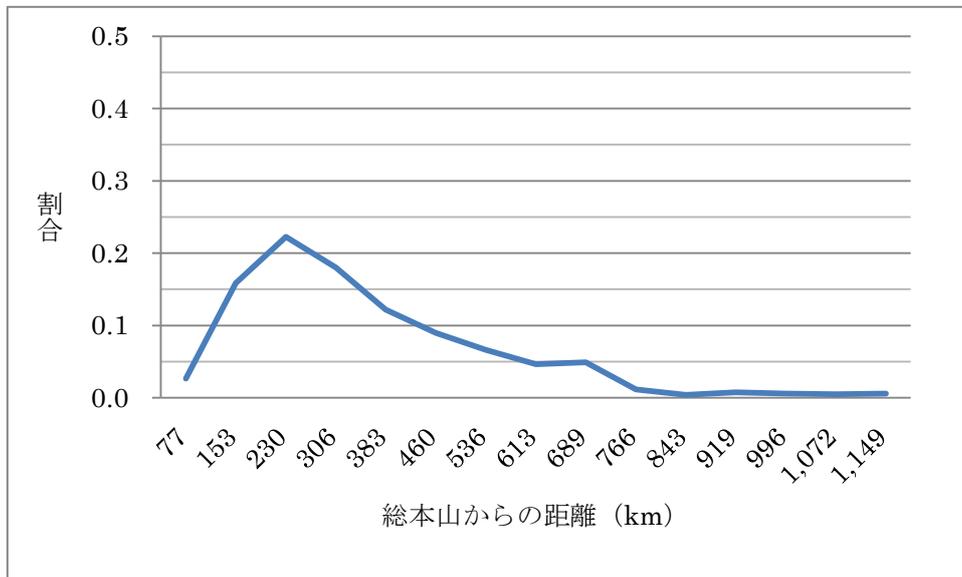


図4：曹洞宗総本山（永平寺）からの距離と範囲内の寺院数の割合

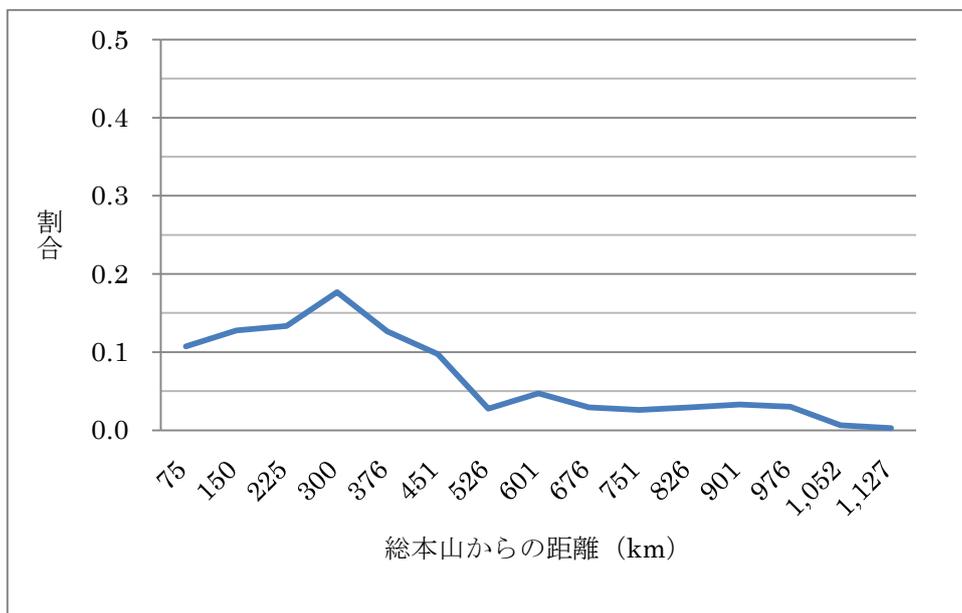


図5：曹洞宗総本山（總持寺）からの距離と範囲内の寺院数の割合

○天台宗

- ・開祖：最澄（767～822）
- ・総本山：延暦寺
- ・所在地：滋賀県大津市坂本本町 4220
- ・総寺院数：3,094 軒

表 5 は天台宗の総本山に対する 3.3.の実験結果をまとめた表であり，図 6 は天台宗の総本山からの距離と範囲内の寺院数の割合のグラフである．表 5 を見ると，天台宗の総本山の延暦寺の半径 30km 以内には 272 軒の寺院が存在することが分かる．平均値の 117.4 の 2.3 倍の寺院が存在するので天台宗の総本山の周囲に寺院が集中しているといえる．図 6 を見ると延暦寺の周囲に総寺院数の 15%以上の寺院が存在していることが分かり，集中していると言える．また図 6 より，総本山から 282km~470km の範囲で寺院が多く集中している事がわかる．282km~470km の範囲では関東地方と重なっており，先に述べた真言宗と同様，小田原，東京などの寺町[7]などの影響を受けたと推測する．

表 5：天台宗の寺院から 30km 以内の寺院数の統計量（軒）

平均値	中央値	最頻値
117.4	89	52
総数	3,094	
延暦寺	272	

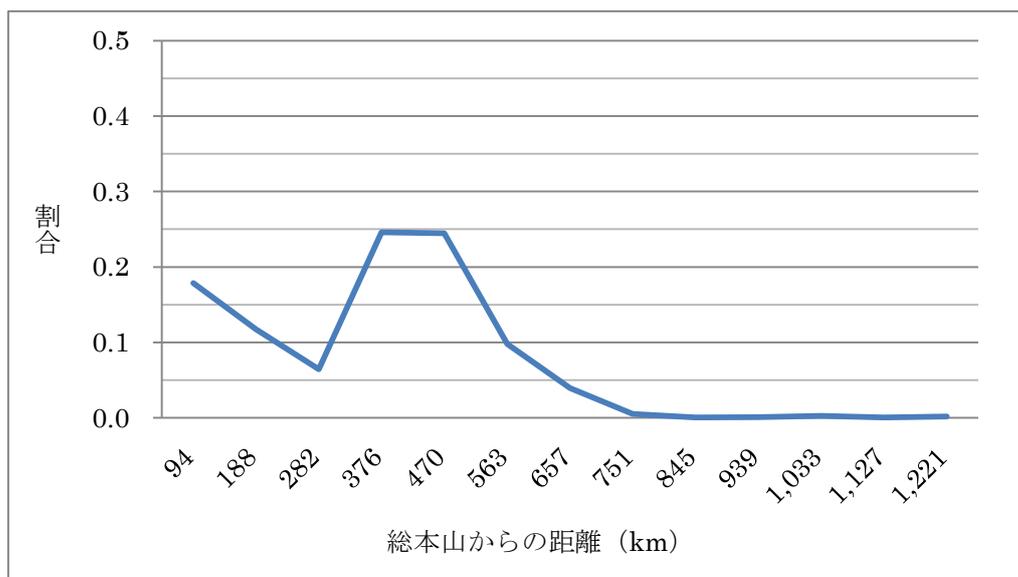


図 6：天台宗総本山（延暦寺）からの距離と範囲内の寺院数の割合

○日蓮宗

- ・開祖：日蓮（1222～1282）
- ・総本山：久遠寺
- ・所在地：山梨県南巨摩郡身延町身延 3567
- ・総寺院数：5,670 軒

表 6 は日蓮宗の総本山に対する 3.3.の実験結果をまとめた表であり，図 7 は日蓮宗の総本山からの距離と範囲内の寺院数の割合のグラフである．表 6 より，日蓮宗の総本山の久遠寺の半径 30km 以内には 393 軒の寺院が存在することが分かる．393 軒は平均値 190.5 の 2.1 倍であり，このことより日蓮宗の総本の周囲には寺院が集中して存在していることが分かる．図 7 のグラフを見ると久遠寺から約 140km 以内の範囲には総寺院数の 35%近くの寺院が存在しており，周囲にある程度集中していることが分かる．

以上のことより日蓮宗では仮説通りの結果が得られたとする．

表 6：日蓮宗の各寺院から 30km 以内の寺院数の統計量（軒）

平均値	中央値	最頻値
190.5	121	19
総数	5,670	
久遠寺	393	

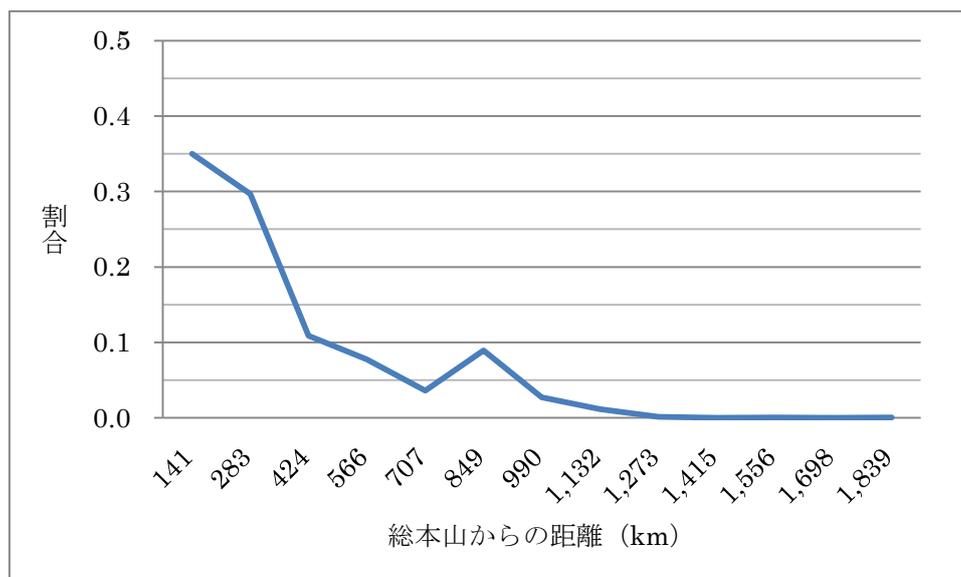


図 7：日蓮宗総本山（久遠寺）からの距離と範囲内の寺院数の割合

## ○浄土真宗

- ・開祖：親鸞（1173～1262）
- ・総本山：本願寺（西本願寺），東本願寺
- ・所在地：本願寺（京都府京都市下京区門前町）  
東本願寺（京都府京都市下京区常葉町 754）
- ・総寺院数：21,300 軒

浄土真宗では、西本願寺とも呼ばれる本願寺と東本願寺の二つの総本山が存在する。表 7 は浄土真宗の総本山に対する 3.3.の実験結果をまとめた表であり、図 8、図 9 は浄土真宗の総本山からの距離と範囲内の寺院数の割合のグラフである。表 7 の結果を見ると、平均値が 646.4 である。それに対して本願寺と東本願寺ではそれぞれ、966 軒、962 軒であり、浄土真宗では仮説通りの結果が得られた。先に結果を述べた総本山が二箇所ある曹洞宗とは違い、二箇所ある総本山が近所に存在していることで勢力の分散がされずに総本山の周囲に寺院が集中したと考えられる。図 8、図 9 を見ると 86km 以内の範囲で総寺院数の 25%以上の寺院が存在していることが分かり、総本山の周囲に寺院が集中しているといえる。

以上のことより浄土真宗では、仮説通りの結果が得られたとする。

表 7：浄土真宗の各寺院から 30km 以内の寺院数の統計量（軒）

平均値	中央値	最頻値
646.4	441	36
総数	21,300	
本願寺（西本願寺）	966	
東本願寺	962	

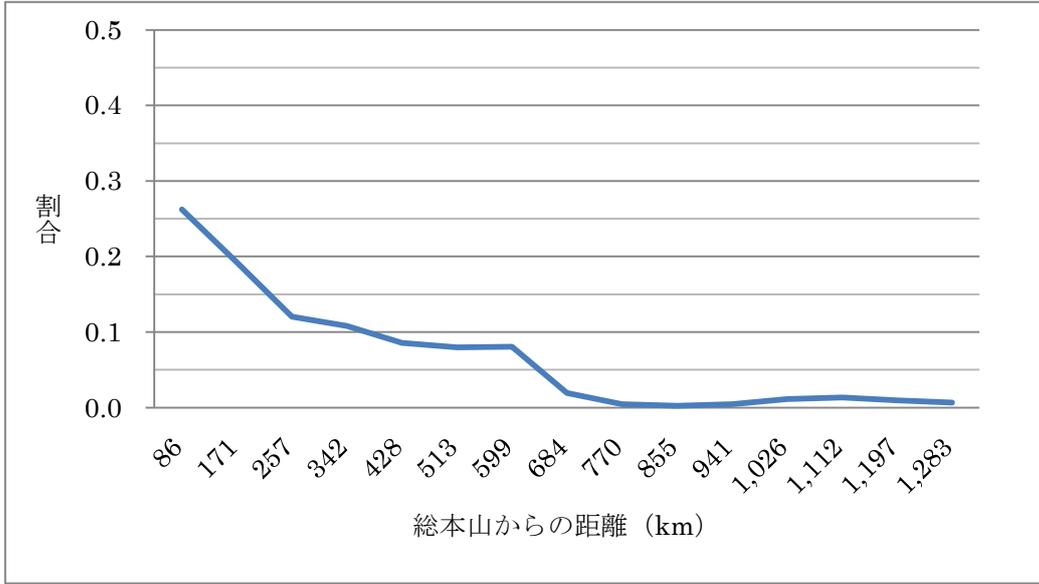


図 8：浄土真宗総本山（本願寺）からの距離と範囲内の寺院数の割合

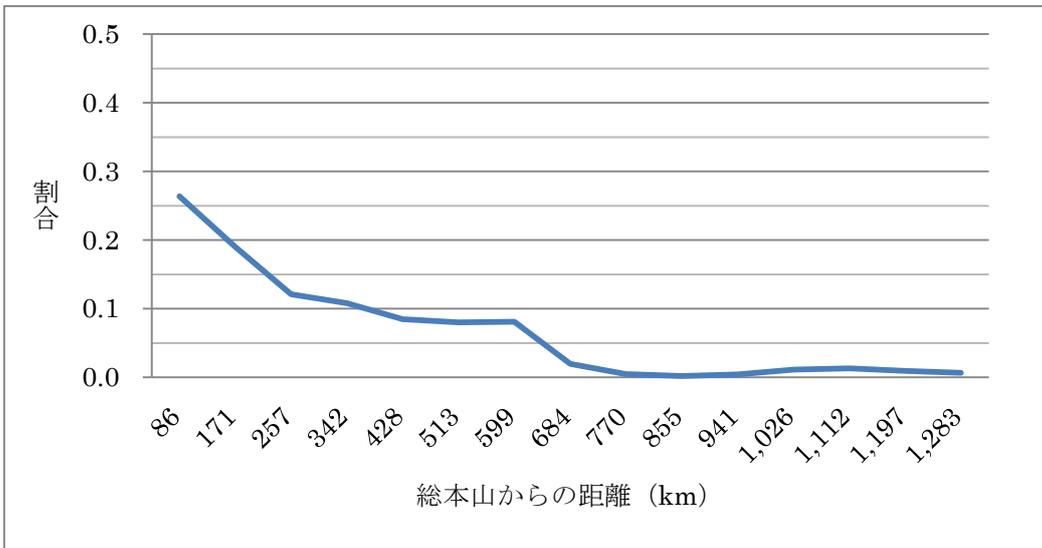


図 9：浄土真宗総本山（東本願寺）からの距離と範囲内の寺院数の割合

## ○臨濟宗

- ・開祖：栄西（1141～1215）
- ・総本山：建仁寺，建長寺
- ・所在地：建仁寺（京都府京都市東山区小松町 584）  
建長寺（神奈川県鎌倉市山ノ内 8）
- ・総寺院数：5,728 軒

臨濟宗は総本山が建仁寺と建長寺の二箇所ある。表 8 は臨濟宗の総本山に対する 3.3. の実験結果をまとめた表であり，図 10，図 11 は臨濟宗の総本山からの距離と範囲内の寺院数の割合のグラフである。表 8 を見ると，建仁寺，建長寺の半径 30km 以内にはそれぞれ 331 軒，142 軒という結果になった。今回の実験では，建仁寺では仮説通り総本山に寺院が集中したが，建長寺では平均を下回ってしまった。二つの総本山が近くに存在する浄土真宗と二つの総本山が離れて存在する曹洞宗の結果を見ると，やはり総本山が離れて建てられたことで勢力が分散してしまったと考えられる。また，図 10 を見ると建仁寺の周囲には 3 割以上の寺院が集中していると分かる。しかし，図 11 を見ると，148km~295km の範囲で総本山の周囲よりも寺院が多く存在している。これは名古屋や岐阜に寺院が集中しているためである。名古屋や岐阜ではかつて城下町として栄え，城下町には城を守るために寺を密集させた寺町が作られたという背景がある[7]。その名残が現在でも残っており，名古屋や岐阜に寺院が多く存在していると推測する。

臨濟宗では，建仁寺では仮説通りの結果が得られ，建長寺では仮説通りの結果が得られなかった。

表 8：臨濟宗の各寺院から 30km 以内の寺院数の統計量（軒）

平均値	中央値	最頻値
169.6	126	332
総数	5,728	
建仁寺	331	
建長寺	142	



図 10：臨済宗総本山（建仁寺）からの距離と範囲内の寺院数の割合

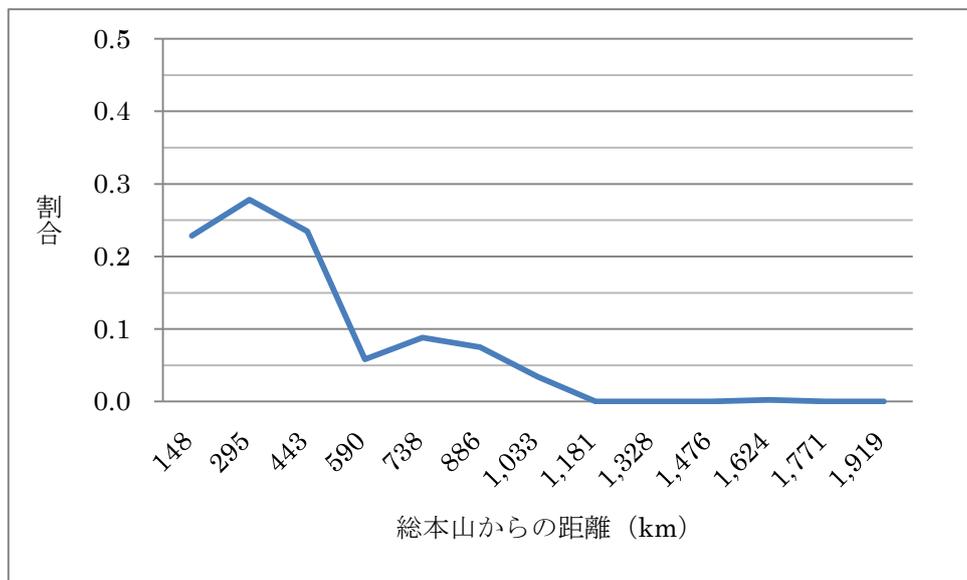


図 11：臨済宗総本山（建長寺）からの距離と範囲内の寺院数の割合

## 4.2. 全体の考察

総本山が一つの宗，総本山が二つ存在する宗の二つに分けて考察を行う．

まず，総本山が一つの宗である，浄土宗，真言宗，日蓮宗，天台宗の考察を行う．実験 3.3.の結果を見ると，浄土宗以外の宗の総本山の周囲にはそれぞれの宗の平均の2倍近くの寺院が存在しており，浄土宗を除く全ての宗で総本山の周囲に寺院が集中していることが分かった．つまり仮説通りの結果が得られたことになる．唯一仮説通りの結果が得られなかった浄土宗は，総本山から 30km 以内の範囲に 1,083 軒の寺院が存在する．それは総寺院数の 8,377 軒の約 13%であり，この 13%という値だけを見ると集中していることが分かる．さらに，他の宗を見ても総本山から 30km 以内に 1,000 軒以上もの寺院が存在する宗は無かった．しかし，浄土宗では仮説通りの結果が得られなかった．この理由としては，この実験 3.3.では寺院が集中している地域では，その地域にある寺院の多くが互いに 30km 以内に存在しているという判定になってしまうため，一部の密集している地域に平均が引っ張られてしまうという問題があったと考えられる．このことより，この実験の結果として浄土宗は，仮説通りの結果が得られなかったが，実際は浄土宗の周囲にも寺院が集中しているといえる．

実験 3.3.の結果だけを見ると，総本山が一つの宗では全ての宗で総本山の周囲に寺院が集中しているという結果が得られた．しかし，3.4.の結果より得られた総本山からの距離と割合のグラフでは，総本山の周囲以外にも寺院が集中している地域が存在していることが分かった．真言宗と天台宗では，共に約 450km 前後の地点で総本山の周囲よりも関東地方に寺院が集中していることが分かった．[7]によると城下防衛のために城下町には寺院が配置されていたという背景がある．関東地方には小田原城，江戸城などの城が存在した．それらの城下町に寺院が集中して配置された名残があり，現在にもそれが存在していると考えられる．

次に総本山が二つ存在する宗の考察を行う．総本山が二つ存在する宗では，二つの総本山が近くに存在しているのか，離れて存在しているのかで異なる結果が得られた．総本山が近くに存在している宗は浄土真宗だけである．浄土真宗の 3.3.の実験結果を見ると，総本山から 30km 以内の範囲に存在する寺院数は平均値よりも高い数値が得られ，仮説通りの結果が得られた．次に総本山が離れて存在している宗では，片方の総本山では仮説通りの結果が得られ，もう一方の総本山では仮説通りの結果が得られないという結果であった．これは，総本山が離れて存在していることによって，勢力が分散してしまったことが原因だと考えられる．

## 第5章 おわりに

本研究は、寺院の多くが他の寺院と助け合って治めており、宗の行事は総本山の周囲の寺院が協力して行っている。ということより総本山の周囲には寺院が集中しているという仮説を立て、その仮説を検証するために研究を行った。検証の結果は、本研究では総本山が一つの宗では全ての宗で仮説通りの結果が得られた。総本山が二つの宗で、その二つが離れて存在する宗では、二つのうち片方の総本山の周囲にだけ寺院が集中し、もう片方の総本山では寺院があまり集中しなかった。また、二つの総本山が近くに存在する宗では、総本山の周囲に寺院が集中した。本研究の検証対象となった戦前に国家に認められた13宗で寺院が1,000軒以上存在する七つの宗の総本山全10軒中8軒で仮説通りの結果が得られたということになった。やはり、二ヶ所ある総本山が離れて存在している宗では、勢力の分散のようなことがあったのではないかと推測する。

研究している過程で、かつては城下町で防御線として寺院が建てられたという事実を学びとても興味を持った。文献[7]では寺院が集中する地域を寺町と称し、城下町に限らず、港町などでも存在していた寺町が、現代にも存在しているのか否かの研究が行われている。実際、本研究の過程で各宗の寺院分布を見ると、新潟県上越市周辺、関東、名古屋近辺、大阪、などに寺院が集中している宗が多くあった。今回の実験の結果、総本山周囲以外の地域でも寺院が集中していた地域が多くあった。そのようになった原因の一つに、先に述べた寺町が影響したと考える。

最後に今後の課題として、歴史を深く学ぶということだと考える。先行研究などでは宗を一つに絞った研究が見られ、それらはその宗の歴史について掘り下げた分析がされている。本研究では、仏教全体の歴史についての参考文献を元に考察を行った。仏教全体の歴史についての文献でも、重要な項目は網羅されているが、各宗の極めて深い歴史などを交えて考察が行われたとは言い難い。一つの宗に特化した本を参考にすることで、より深い歴史の因果関係の理解が進む。その結果、新たな考察の材料の発見や、寺院の分布の仕方、本研究で扱った総本山や文献[7]の寺町以外の新たな特徴をつかむことができるかもしれないと考える。

## 参考文献

- [1] 深見公子：“一冊でわかるイラストでわかる 図解仏教”，pp. 46. 105，成美堂出版（2014）
- [2] 太田由紀江：“カラー版 イチから知りたい 仏教の本”，pp. 25. 171，西東社（2014）
- [3] 文化庁：“宗教統計調査結果”，p.50,  
<http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/nenkan/pdf/h24nenkan.pdf> (2011) 2014年12月25日  
確認
- [4] 永幡豊：“北海道における仏教寺院の分布について”，平成25年，地理学論集紀要第88集，p. 6-13 (2013)
- [5] 小田匡保：“日本における仏教諸宗派の分布 一仏教地域区分図作成の試み一”駒澤地理紀要第39集, pp37 . 58 (2003)
- [6] NHK出版：“NHK 趣味 Do 楽 はじめての四国遍路旅”，p. 4，NHK出版（2014）
- [7] 山田誠：“近代日本の寺町における持続と変容一歴史地理学の立場から一”，平成23年，仏教文化研究所紀要第50集,pp. 1-24 (2011)